

# 科学的社会認識形成における情意的領域の評価ストラテジー — MACOS 評価プログラムを手がかりとして —

棚橋 健治

## I. 学習の内的動機としての「興味・関心・態度」の評価

いわゆる「新学力観」にもとづく新学習指導要領の実施、「生きる力」の育成を提唱する中教審の答申などを受けて、近年、情意的領域の学習成果を評価することの重要性が強調されている。しかし、多くの場合、生活態度、学習の構えといったような学校教育全般で担うべき一般的な教育目標あるいは学校教育の範囲を越えて生活の中で形成されるものと、各教科が各々独自に形成すべきものとの区別を明確にせずに論じられている。その結果、評価の対象となる学習の存在やその成否と無関係なものになり、授業にフィードバックされることもなくなっている。社会科が独自に形成すべき情意的領域の学習成果の評価とは、何をどのように評価することなのか。それを明らかにするためには、「新学力観」「生きる力」というキーワードのもとで論じられている社会科論自体を見直すことが必要であるが、その考察は別の機会に譲る。当面、社会科の役割を広く市民的資質一般の形成とすることによって良き市民として望ましい態度一般の形成をとらえようとするのではなく、社会科の役割を科学的社会認識形成として、社会を科学的に認識する者であれば当然もつであろう興味・関心、当然とるであろう態度に限定して、その構造ならびにその判定方法を考察することが有効であろう。そのためには、

1). 科学的社会認識形成を図る社会科プロジェクトで評価プログラムを伴っているものの中から、情意的領域が明確な形で扱われ、しかもそれが科学的社会認識形成特有なものになっているものを

選定し、分析対象とする。

2). 選定された社会科プロジェクトの社会認識形成論にもとづいて、その目標を考察し、その中の情意的領域の目標の構造を、その理論的背景を踏まえて明らかにすることによって、科学的社会認識形成における情意的領域の内容を明確にする。

3). 明らかになった情意的領域目標各々の具体的な評価手法を、選定された評価プログラムの理論ならびに実践報告の分析を通して考察する。

4). 上記の成果にもとづいて、科学的社会認識形成を図る社会科に特有の情意的領域の評価ストラテジーを理論化する。

ことが求められよう。本稿は、このような課題に対するひとつの答えを、MACOSの評価プログラムの中に見出そうとするものである。

MACOSについては、「人間とは何か」「何が人間を人間たらしめているか」といった問いを通して、人間を探究させるものになっているということから、60年代の科学的社会認識形成としての社会科に位置付けるよりも、むしろ70年代に入って展開されるいわゆる「人間化」に位置付けるべきだとのとらえ方もある。また、人間を探究しているのであって、社会を認識させる「社会科」とは言えないとするとらえ方もある。しかし、MACOSは、文化人類学、行動科学を中核にする人間に関する科学的な基本概念とそれらの学問の探求方法をコース編成の基本原則とするという域を出るものではない。また、文化人類学や行動科学の研究は、ある社会の構成員が持つ世界観の把握を通してその社会の社会組織・制度などを解明しているという点で、社会認識のひとつの形態を示しているといえる。MACOSは、まさに60年代

の「現代化」における社会科学科としての社会科の一形態ととらえるべきカリキュラムであるといえよう。<sup>1)</sup>

MACOSは「学問の構造」の考え方に立脚して科学的社会認識形成を図ると同時に、「学習の意志」という形で科学的探求の推進力に位置づけるものとしての社会科学的好奇心や思考モデル、探求姿勢を明らかにし、その評価方法を提案しているということでも注目に値するが、評価という観点からの先行研究は見られない。MACOSの理論的指導者であるブルーナーは、学習の真の動機は「外的動機」にではなく「内的動機」に求められるということを中心とし、その喚起を教授・学習過程の組織化のポイントとしていることで有名であり、MACOSの情意的領域はそのような考え方に立脚して構成されている。社会科は内容の論理を抜きにしては成り立たないという性格をもつ教科であり、その学力・評価についての論議は、まさにこのような学習内容・過程そのものに対する喜びやその達成感・満足感といった内的動機による学習の成立を図ることと深く関係している。したがって、今、MACOSをあらためて見直し、その評価論を検討することは示唆するものが大きいのではなからうか。

## II. MACOSにおける情意的領域の目標

### 1. コースの構造と目標

MACOSは社会的動物としての人間の特徴を「人類が備えている人間らしさとは何か」「人間はいかにして人類への道をたどったか」「人間はいかにしてその道をより発展させていくのか」<sup>2)</sup>の3つの視点でとらえさせるものになっている。そして、人間性を賦与する5つの力として「道具づくり」「言語」「社会組織」「長期にわたる子ども時代の管理(子どもの育成)」「人間が自分の世界を説明しようとする衝動(世界観)」<sup>3)</sup>を挙げて、それら5つの主題の下に、9つの概念をらせん状に配し、具体的な分析対象として「サケ」「セグロカモメ」「ヒヒ」「ネトシリク・エスキモー」<sup>4)</sup>を取り上げて学習するものとなっている。9つの概念とは「ライフサイクル」「適応」「学習」「攻撃」「集団の組織」「技術」「伝達と言語」「世

界観」「価値観」<sup>5)</sup>である。たとえばネトシリク・エスキモーを題材とするコースでは、表1に示したように、エスキモーに伝わる伝説や物語、彼らの行動の根底に流れる信念などから“精神文化を形成する生き物としての人間の姿”を、狩猟というエスキモーの食料調達の方法から“道具を作り使う生き物としての人間の姿”を、エスキモーの自給自足経済、男女の分業と依存関係、構成員の社会化のあり方から“社会を構成する生き物としての人間の姿”などを学ぶようになっているのである。

このような構造をもつコースの目標のうち、特に情意的領域に深く関連する目標としては、次の2点が挙げられている。

「1. 人間の本質について子どもが考えるように鼓舞すること。そのために、行動科学や文化人類学の近年の成果から得られる動物の行動や人間のグループについての興味深い研究を、子どもに提供する。それらの研究は、子どもたちが自分たち自身についてそして人類一般について知っているかと思っていることを、もう一度吟味したいという気持ちにしてくれると思う。

2. 私たちが受け入れることのできる行動というものは、私たちの文化の産物であるという事実についての意識を、子どもの中に目覚めさせること。」<sup>7)</sup>(下線は引用者による。以下、同様。)

第1の目標では、人間についての科学的探求の過程と好奇心、関心を煽るということが述べられ、第2の目標では、文化人類学者がさまざまな文化の研究を通して人間一般について考察するのと同じ姿勢で自文化を相対的にとらえる態度を形成するということが、述べられている。

教育目標の3領域のひとつとされる情意的領域の内容と構造については、未だに不明確なところが多く、衆目の一致する体系化がなされていないと言えないが、クラスウォールの5段階、すなわち「受け入れ」「反応」「価値付け」「総合化」「複合的価値による個性化」が比較的一般化していると言えよう。これは、気づき、関心を持つことに始まり、最終的には多様な価値を統合し、ある生き方に従って自分が行動するということまでを含むものである。それに対して、MACOSにおける情意的領域の目標は、そのような子どもの生

表1 「内陸キャンプのネトシリク・エスキモー」の内容分析表<sup>6)</sup>

セクション名	・描かれる人間の特性 ・人間性を賦与する力	概念	小単元名	内容・教材
I ネトシリクの世界	精神文化を形成する生き物としての人間  「世界観」 「言語」	世界観 価値観 伝達と言語 適応	A. 人間はふたつの世界に生きる	精神世界、信仰、世界の起源
			B. 人間の行動に影響を与える物理的世界と象徴の世界	ネトシリクの生活の根底にある信念、自分たちとの類似性
			C. Knud Rasmussen と彼の旅	日誌に見られるネトシリクの習慣、信仰、伝説
			D. 家族	生活の場としての家族、若者への知識の伝授、家族の楽しみ
			E. ツンドラにおける漂流生活	北極の環境、それに適応する動物
II 狩りの方法	道具を作り使う生き物としての人間  「道具づくり」	技術	A. 狩りの計画	道具を使う狩猟の方法・計画
			B. 道具	ものや社会を変える道具
			C. 道具の設計	限られた材料で道具を作る
			D. ネトシリクの道具はどのように使われるか：弓と矢のゲーム	弓と矢が実際にどのように使われるか
			E. Crossing-Place 猟	カヤックの使用、獲物の特性を利用した効率の良い狩猟
			F. Crossing-Place 猟ゲーム	狩猟ゲームの実践
			G. カリブ・キャンプでの役割	キャンプでの家族の役割
			H. 狩人の誕生	赤ん坊誕生の際の行事、信仰、習慣（アメリカと比較）
III ネトシリクの家族	社会を構成する生き物としての人間  「社会組織」 「子どもの育成」	学習  集団の組織	A. 秋の川でキャンプする一家	生活維持のためだけでなく楽しみを共有する家族、家族以外の人々との交わり
			B. 冬支度をする男たち、女たち	生活の中での男と女の役割分担
			C. どのように Itimangnark は妻を娶ったか	結婚、ふたりの共同生活
			D. 子どもの学習	伝統・習慣などの家族内における受け継ぎ、社会の一員（アメリカとの比較）
			E. 家族の絆と期待される行動	家族の結びつき、一般論

き方を規定するような具体的な価値体系の形成を扱うのではなく、より限定された形で、科学的探求の端緒となり、また推進力となる動機・動因ならびに科学的探求を進めようとする態度を考えていると言えよう。

そこにはブルーナーの言う「学習の意志」の考え方がある。その要素としては、不明瞭なもの、未完成なもの、不明確なものに向けられる注意を意味する「好奇心」、より高いレベルの能力が要求されることを成就しようとすることを意味する「能力」、高いレベルのモデルを達成している者の態度の模倣・内面化を意味する「同一視」などがある。<sup>8)</sup>MACOSにおいては、この「好奇心」が文化人類学・行動科学的「好奇心」として、また「能力」が文化人類学・行動科学的探求モデルへの「向上意欲」という形で具体化され、「同一視」が文化人類学者的探求態度という形で具体化されて、各々、情意的領域を構成する部分となっていると考えられる。

## 2. 人間の本质・文化の産物としての行動への好奇心の焦点化・探求意欲の喚起 内的動機の原形である好奇心は、自分にとって

よくわからないものやことに会った時には、普通、自然に沸き起こるものである。教育に求められることは、その質を、受動的・偶然的なものから能動的・持続的なものへと変化させ、さらに探求的なものへと変化させることであるとされている。

「子どもが自分自身の注意を自由に操れるようになることを援助するにはどうすればよいか、注意を長い間関連性を持って維持するにはどうすればよいか、…（中略）…物語の内的な連続性が、外部にある心を惑わせるものよりも人を動かすようになるには、何が必要なのか。…（中略）…この重要な人間の動機は、最も信頼し得る動機であり、これを重視する限り、私たちの行なう人為的な教育も、その人為性を軽減することができる。それは、まず好奇心や注意の皮相的な形に関連づけた形で初め、それからより敏感かつ積極的な好奇心の育成へと進む。」<sup>9)</sup>

「MACOSは、人間や他の動物についての研究への人類学的ならびに生物学的のものへの導入を強調し、十分な民族誌学的な証拠調べを強調しながら、人間性研究という枠組みの中で作成されている。」<sup>10)</sup>

MACOSでは、「注意を長い間関連性を持って維持させる」「物語の内的連続性」を、子どもにとって何の関係もない様に見えるさまざまな動

物の行動や、子どもにとって馴染みがなく奇異にさえ見える異文化に生きるエスキモーの行動・習慣・考え方などの、系統だった説明に求めている。そのような系統だった説明を試みているのが、文化人類学・行動科学であると考えられており、社会科教育に求められることは、子どもの皮相的な好奇心を文化人類学・行動科学的好奇心へと深めることであるとされているのである。

文化人類学・行動科学的なものへと変わった好奇心は、探求の端緒となるが、それを具体的な探求として推進させる力として考えられていることが、文化人類学・行動科学的探求モデルである。この探求モデルがブルーナーが「学問の構造」と呼んだものである。

「行動科学の道具を用いることによって、世界は観察することができ、推測することができ、ある程度整理したり理解したりすることができる。そして、個々の生命を人間のより大きな流れの一部として考えることができる。」<sup>11)</sup>

「関係の構築には、そこから考えの秩序だてや系統化を引き出す非常にたくさんの特別な知識を蓄積することを含む。コースの中で開発したライフサイクルの概念は、このような構築の過程を良く表わしている。若者はまず語彙を学ぶ。誕生、繁殖、死というのはすべての種に共通であるということを見発する。それから人間および他の動物に特別な変化に関する情報を捜し、蓄積する。life ropes やライフサイクル表の作成は、語彙や情報を使う経験、そして自分たち自身および他のライフサイクルに関する疑問を起し探究する経験を与える。これらの活動から、成長と発展の順次的な段階を見てさまざまな動物のライフサイクルの関係を見つける組織化された方法をモデルは開発する。」<sup>12)</sup>

子どもは、自分なりの思考モデルを持っているが、それでは事象を十分に説明することがむづかしく、より有効な思考モデルを求めることになる。それが、意図的・計画的な営みとして構成された社会科で、子どもの探求を推進させる力となると考えられているのである。

「コースは構造それ自体の習得を目標とはしていないが、構造は思考の過程を手助けし、重要な疑問を起し調査する道具になるので習得する。…(中略)…子どもが自分の思考を組み立てるのに構造を知っていることが有益であることに気づき、構造を発展させる喜びを知ることを期待している。」<sup>13)</sup>

このような探求モデルへの向上意欲は、目標となるモデルによる探求を実際に達成している者へと向けられると、「同一視」が発生するのであり、同一視の対象となる科学者(MACOSの場合それは主として文化人類学者)の探求態度を、子ども自身の探求態度として内面化するということと密接に関係してくることになる。

### 3. 文化を相対化し人間理解を図る態度の形成

MACOSにおいて考えられている文化人類学的探求態度には、ふたつの局面が見られる。第1は、科学者として研究対象に向かう時の基本的姿勢であり、たとえば、問題の明確化、仮説の形成、観察・聞き取り調査・文献調査、情報の蓄積・保持、資料解釈、分類、一般化・抽象化など一連の社会科学技能<sup>14)</sup>を用いて対象を分析しようとする姿勢である。いわば科学的研究手順を尊重し、それに則って事象に対峙するという態度であり、文化人類学に限らず科学一般に通ずるものである。第2は、科学の中でも文化人類学という学問に固有の研究姿勢である。それは、「比較・対照」という方法を用いて、「文化の相対的認識」を行なうことによって、「人間の科学」として、文化の研究を手段にして人間一般の特徴を求めるというものである。

「幸せそうに笑っているネトシリクの子どもを見てくすくす笑っている児童がいるのに気づいた教師は、多くの点で見知らぬ外国人ではあるが本質的な人間性や子どもらしさを持つ人間に対して、鑑識眼をもって自分を同一視している児童の姿に気づくのである。そのようなアメリカの子どもたちは、ネトシリクの子どもとの類似性を感じることができ、ネトシリクの子どもと喜びを分かちことができ、そしてそれ故に、関係すなわちそのような人々への肯定的な価値付けというものを感ずることができるのである。」<sup>15)</sup>

では、このように設定された情意的領域の目標達成はどのようにして評価するとされているのであろうか。

## III. MACOSにおける情意的領域の目標達成の評価方法

### 1. 観察法と質問紙法による評価

MACOS評価プログラムは、作成途上のカリ

キュラムの有効性の吟味と改善箇所の確認という意図の下に実施されたものであるため、カリキュラム評価という側面と実際に集団としてのあるいは個々の子どもが学習成果として獲得したことの判定といった学習評価という側面とをあわせもち、学習成果、教授スタイル、教材やメディアなど広範な評価対象が設定されている。そこで主に用いる評価手法として5つの手法が挙げられ、「小グループ・インタビュー」「教室環境チェックリスト」「創造的構成」「内容質問事項」「授業観察」と名づけられている。また、この5つの手法とは別に、後に「SD法」も取り入れられている。

情意的領域の目標達成の評価は、主に観察法と質問紙法によって行なわれている。観察法は一種の参加観察法としての構造化面接である「小グループ・インタビュー」という形をとり、質問紙法は文字を媒介とする制限回答形式の構造化面接とも言えるもので、「教室環境チェックリスト」という形と、「SD法」の形をとっている。また、一定の主題の下に子どもに自由に自己を表現させ、それを分析する一種の投影法が「創造的構成」という形で取り入れられているが、その解釈の仕方や利用については明確になっていない。

「小グループ・インタビュー」<sup>16)</sup>は、例に示したような質問を、インタビュアーが複数の子どもに対して行なう。子どもの回答形式は特に定められておらず、適切な回答を引き出すために、適宜、補充質問等を加える自由応答形式となっている。MACOSでは、示された各評価手法の中で、このインタビューを最も重視し多用している。「チェックリスト」<sup>17)</sup>は、教材に対する興味、学習のスタイルなどについての質問に対して、3～10項目程度の選択肢を提示し、自分がふさわしいと思うもの1～3項目にチェックさせるというものになっている。「創造的構成」<sup>18)</sup>は、演劇、詩、挿絵入りの短い物語、続き漫画、新聞論説、ゲームなどを子どもに作らせるもので、子どもが理解したことや感じたことなどを統合的に表現するものである。SD法<sup>19)</sup>は、ネトシリックとアメリカ人（すなわち被験者である子ども自身）ならびにそれらを取り巻くものに対して、子どもが抱くイメージを直接的に表現した相反する一対の言葉を提示し、

どちらにより近いかを5段階の尺度で答えさせるものである。

では、これらの手法は、先述の情意的領域各目標における評価では、実際にどのように用いられているのであろうか。

## 2. 好奇心の焦点化と探求モデルの精緻化の把握

各々の評価手法、そしてインタビューにおける各質問やチェックリストにおける各問など、ひとつひとつの問いかけで判定することは、ある程度設定意図はあるものの、あらかじめ明確に体系化されているわけではない。特に、最も重視されているインタビューでは、得られた返答から解釈できることを引き出し、その都度、目標との関わりで評価をしている。また、“好奇心”→“能力向上意欲”→“同一視”は、一連のものであり、重なり合う所も多いため、はっきりと三者を区別して評価するということはむづかしい。そこで、得られた返答がどのような観点から解釈できるかによって、各評価手法の個々の問いかけの例を分類して、目標との関係を考察したものが表2である。

インタビュー、チェックリスト、創造的構成、SD法など複数の手法を使って子どもから引き出してきた返答から読み取るべきことは、4つに整理できよう。それは、1)授業で分析対象として提示された動物やエスキモーに対して好奇心をもてたか、すなわち“好奇心の有無”、2)それらの何について好奇心を抱いたのか、すなわち“好奇心が向けられている対象”、3)その好奇心をどのように満たそうとしたのか、すなわち“好奇心の満たし方”、4)提示された動物やエスキモーをどのような視点で理解しようとしたのか、すなわち“対象の理解の姿勢”である。

まず、学習の対象となる動物なりエスキモーなりに、たとえ受動的・羅列的で漠然としたものでも、何か学んでみたいと思う気持ちをもどの程度持っているかが読み取られる。そのために、MACOSでは、たとえば単元の印象を問うたり、質問の頻度などで学習への関与の積極性を測ったりしている。

自分の五感に触れる不確かなものや未完成なものに対して、手当たり次第に向けられる注意で始

<インタビューの例><sup>16)</sup>

- 「内陸キャンプのネットシリック・エスキモー」単元に続いて：
1. セグロカモメやヒヒの勉強と比べて、コースのこの部分に対するあなたの反応はどのようなふうですか。
  2. ネットシリックの家族は、何らかの形であなたの家族と似ていますか。どのように似ていますか。どのように違っていませんか。
  3. ネットシリックが本当に心配しているのは何についてだと思いますか。
  4. ネットシリックについてのこの教材はすべて本当だと思いますか。
  5. インタビューに先立って、ネットシリックの道具を描いた3～4のエスキモーのカードを選ぶ。それらを子どもに示し、尋ねる。ネットシリックはこれらをどのように使いますか。ネットシリックの生活について、これらの道具はあなたに何を教えてくれますか。
- 「海水上のネットシリック・エスキモー」単元に続いて：
1. あなたが授業中に見た映画の中に、それを見たことによってネットシリックを賞賛するようになったというようなものはありましたか。ネットシリックを嫌いになったというようなものはありましたか。
  2. Nulijakukの話や雷と稲妻が変わった少年と少女の話をどう思いますか。なぜネットシリック・エスキモーはこのような話をするのだと思いますか。このような話をどう感じますか。
  3. 次の言葉を書き、子どもたちに見せる。恐怖、愛、友情、信念、家族、夢、嫉妬、殺害。単語を読みながらリストを子どもたちに見せて尋ねる。ネットシリック・エスキモーの生活において彼らに重要なものとして、あなたはどのふたつの単語を関係づけますか。それはなぜですか。
  4. 「サケ」「セグロカモメ」「ヒヒ」「あなた」という単語を子どもたちに示す。それらを読み聞かせてから尋ねる。あなたはネットシリック・エスキモーについても勉強しました。これらのどれが最もネットシリックに似ていますか。なぜですか。

<教室環境チェック・リストの例（ネットシリック・エスキモー）><sup>17)</sup>

- これまで私は、ネットシリック・エスキモーについては次のことから最もよく学びました。（3つチェックすること）
- \_\_\_\_\_ 小冊子を読むこと
  - \_\_\_\_\_ 映画やスライドを見ること
  - \_\_\_\_\_ 授業中に狩りのゲームをすること
  - \_\_\_\_\_ レコードを聴くこと
  - \_\_\_\_\_ 小グループでの討論に参加すること
  - \_\_\_\_\_ クラス全体での討論に参加すること
  - \_\_\_\_\_ 先生の説明を聞くこと
  - \_\_\_\_\_ 道具のようなものを作ること
  - \_\_\_\_\_ 地図や絵を描くこと
  - \_\_\_\_\_ 物事を演ずること
  - \_\_\_\_\_ その他（それはどういうことか \_\_\_\_\_）
- エスキモー単元のどの部分に一番興味を持ちましたか。（ひとつチェックすること）
- \_\_\_\_\_ 北極地方の動物についての学習
  - \_\_\_\_\_ エスキモーが使う道具についての学習
  - \_\_\_\_\_ エスキモーの生活や労働の仕方についての学習
  - \_\_\_\_\_ エスキモーの感情、夢、信仰についての学習

<創造的構成の例><sup>18)</sup>

- 「老婆」（Ned Wasserman 作）
- 私は Kigtak という名前です。私は家に入らず氷の上にいるということを怖いとは思いません。他の老人たちがこのようにして死んでいくのだということを、私は知っています。私は、息子が私を待っているなどとは思いません。それが私たちの習慣なのです。

<意味差別法（SD法）テストの例><sup>19)</sup>

- エスキモーの家族
- |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |
|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|
| 分け合う  | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | 自己本位な |
| 単純な   | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | 複雑な   |
| 怠惰な   | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | 勤勉な   |
| 幸せな   | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | 不幸な   |
| 親切的な  | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | 冷酷な   |
| 貧乏な   | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | 裕福な   |
| 原始的な  | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | 先進的な  |
| 明るい   | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | 暗い    |
| 無知な   | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | 賢明な   |
| 法に沿った | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | _____ | : | 無法な   |

表 2 評価の実際と目標の関係<sup>20)</sup>

手法	目標との関連		文化人類学・行動科学的探求モデルへの向上意欲		対象の理解の姿勢
	問いかけ	返答から読み取れること	文化人類学・行動科学的探求モデルへの向上意欲	文化人類学・行動科学的探求モデルへの向上意欲	
チェック	a. ネットソリク・エスキモーを扱った単元の印象はどのようなのか b. ネットソリク・エスキモーの学習中、どれくらい頻繁に質問したか c. おもしろいと感じた単元はどれで、退屈だと感じた単元はどれか	好 奇 心 の 有 無 a. 愉快だ、退屈だ、あまり重要ではない b. 頻繁に質問をした、ほとんど質問はしなかった c. ○○単元はおもしろかったが、○○単元は退屈だった d. 興味深い、退屈だ	好奇心が向けられている対象	好奇心の満たし方	
チェック	e. エスキモー単元でどの部分に最も興味を持ったか f. 学習に用いた読み物で最も好きだったものは何か g. 授業中に見た映画の中で最も好きな場面はどこか	好 奇 心 の 有 無 a. 北極の動物、エスキモーの道具、夢 b. 庶民生活の話、恋愛・結婚の話 c. イグルー建築、フサラソソ祭り、伝説の語り d. 信念、なぜならエスキモーは自分の行動や信することを常に注視しているから e. 住んでいるところの違いから、実際は違いますが、どちらも違ふ。 f. 嫉妬は私たちの習慣として、私自信受け入れる	好奇心が向けられている対象	好奇心の満たし方	
イン	h. エスキモーの生活にとって重要なことを表わしている言葉はどれか i. ネットソリクが本当に心配しているのは何についてか j. ネットソリクが家族は君の家族と似ているか、どのように似ているか、どのように違っているか k. エスキモーの老婆(若人)になつたつもりで、自分の気持ちを短い話にせよ	好 奇 心 の 有 無 a. 愉快だ、退屈だ、あまり重要ではない b. 頻繁に質問をした、ほとんど質問はしなかった c. ○○単元はおもしろかったが、○○単元は退屈だった d. 興味深い、退屈だ	好奇心が向けられている対象	好奇心の満たし方	
チェック	l. エスキモーについて何から最もよく学んだか m. エスキモーの学習では何をする事が最も好きだったか	好 奇 心 の 有 無 a. 愉快だ、退屈だ、あまり重要ではない b. 頻繁に質問をした、ほとんど質問はしなかった c. ○○単元はおもしろかったが、○○単元は退屈だった d. 興味深い、退屈だ	好奇心が向けられている対象	好奇心の満たし方	
イン	n. リスあるいはゴラドリを研究しようとしたら、どうするか、他にどのような資料が使えるか、何を捜すか	好 奇 心 の 有 無 a. 愉快だ、退屈だ、あまり重要ではない b. 頻繁に質問をした、ほとんど質問はしなかった c. ○○単元はおもしろかったが、○○単元は退屈だった d. 興味深い、退屈だ	好奇心が向けられている対象	好奇心の満たし方	
チェック	o. 自分がエスキモーであるとしたら、それがどういふことか実感できるか	好 奇 心 の 有 無 a. 愉快だ、退屈だ、あまり重要ではない b. 頻繁に質問をした、ほとんど質問はしなかった c. ○○単元はおもしろかったが、○○単元は退屈だった d. 興味深い、退屈だ	好奇心が向けられている対象	好奇心の満たし方	
イン	p. 君のゴラドリ研究のやり方は科学者のやり方とどこが違うか q. 授業中に見た映画の中で、それを見たことによつてエスキモーを好きあるいは嫌いだになつたものはあるか r. この教材で描かれていることは事実だと思ふか s. エスキモーも君と同じような感情をもっているか、エスキモーにでも君とよく似ているか t. エスキモーの世界の感じ方は私たちのそれと同じか u. エスキモーの赤ん坊殺しの習慣をどう思うか v. エスキモーの生き方や考え方をどう思うか w. エスキモー、アメリカ人について君が持っているイメージはどのようなか	好 奇 心 の 有 無 a. 愉快だ、退屈だ、あまり重要ではない b. 頻繁に質問をした、ほとんど質問はしなかった c. ○○単元はおもしろかったが、○○単元は退屈だった d. 興味深い、退屈だ	好奇心が向けられている対象	好奇心の満たし方	
SD		好 奇 心 の 有 無 a. 愉快だ、退屈だ、あまり重要ではない b. 頻繁に質問をした、ほとんど質問はしなかった c. ○○単元はおもしろかったが、○○単元は退屈だった d. 興味深い、退屈だ	好奇心が向けられている対象	好奇心の満たし方	

まる好奇心の質の変化の判定には、好奇心が絞り込まれているか、何に向かって焦点化しているかを読み取ることになる。そのために、たとえばひとつの学習対象のどの側面に対する学習がおもしろかったかと問うたり、「h. エスキモーの生活にとって重要なことを表わしている言葉はどれか」と問うて、学習対象としてのエスキモーが持つ多様な側面や膨大な情報の中から好奇心の対象を限定できるようになっているのかを読み取ることになる。たとえば、次のような子どもの返答からは、このような好奇心の焦点化を読み取ることができよう。

「エスキモーは、私たちのような人々ですが、私たちとは違った習慣や物を持っています。しかし、私はエスキモーの生涯の生き方や、どのように暮すかということについて、もっと興味を持ちました。」<sup>21)</sup>

この返答は、“教材に直接表現されていたエスキモーの所有物や習慣といった目に見える表面的なものへ向けられている注意”から、“形に現れたそのようなものを規定しているものへ向けられる注意”へと進展していることを示しており、エスキモーの行動の根底にある生き方や価値観の解明という方向での好奇心の焦点化が見られるということになる。これは、子どもの日常生活レベルでの素朴な好奇心から、文化人類学・行動科学の視点が入った好奇心へと進展したと理解できることである。

好奇心とは一種の知的葛藤であり、それをどのように解消しようとするか、すなわち好奇心を満たすためにどうするか、を子どもの返答から読み取ることが必要になる。そのために、MACOSでは、たとえば情報源を問うたり、授業で扱ったものとは別の動物を研究しようとした場合の手順を問うたりしている。

そして、このようにして絞り込まれた好奇心を妥当な手順で満たそうとするとき、根本的にどのような視点で対象を理解しようとしているのかが問題になるのであり、それを子どもの返答から読み取ることが必要になる。そのために、MACOSでは、子ども自身の研究の仕方と、同じ対象に対する科学者の研究の仕方の違いを問うことによって、科学者の姿勢に対する意識を読み取ろうとし

ている。また、子どもが自分とネトシリックもしくは他の動物との間にどれくらいの距離を感じているかを問うことによって、理解し難い習性、単なる受け入れ難い異文化としてではなく、生物あるいは人間としての共通性という視点から理解しようとする態度を読み取ろうとしている。たとえば、

「あなたが授業中に見た映画の中に、それを見たことによってネトシリックを賞賛するようになったというようなものはありましたか。ネトシリックを嫌いになったというようなものはありましたか。」<sup>22)</sup>

「ネトシリックの家族は、何らかの形であなたの家族と似ていますか。どのように似ていますか。どのように違っていますか。」<sup>23)</sup>

といったような問いかけがあり、それに対する返答の一例としては、次のようなものが挙げられている。

「そこには私が好まないことがたくさんありましたが、私はそれらを変えるべきだとは思いませんでした。私は、エスキモーが動物をバラバラにして皮を剥ぐ場面は好きではありません。しかし、映画のそうした場面に手を加えるべきだという理由はありません。その場面は真実であり、エスキモーがしたことなのです。そのままにするべきです。私たちも、魚を食べる時には、まずそれをきれいに洗って、さばかなければならないのです。

自分がそれを好まないからといって……と言うことにはならないと思います。それはエスキモーの生き方なのです。」<sup>24)</sup>このような返答に対して、次のような解釈がなされている。

「……の子どもたちは、民族誌学的な映画は、奇異でなじみのない人々の習慣をよりよく知ることに威力を発揮するのであり、それ故に、そこに描かれている場面を、人間の必要や生活様式から生じる人間の行動の必要範囲の一部として、一層受け入れることが出来るようになることに威力を発揮するのだ、という気持ちを表明したのである。」<sup>25)</sup>これは、十分な民族誌学的調査にもとづいて異文化を客観的に理解した上で、それを多くの文化に共通する何らかのものひとつの現れとして受け入れ、そこから人間に一般的に見られる特性を引き出すという文化人類学の基本的な探求態度を子どもの中に見いだしているのである。

「インタビューから得られた資料は、子ども達はネトシリックのやり方と自分たちのやり方とを結びつけるのだとい



うことを証明した。たとえば、家族や友人達に対する感情とか、お互いのかかわり方とか、家族や友人に対して示す感情といったものについてのネトシリックのやり方と自分たちのやり方とである。人間の行動についての基本的な類似性が把握されたならば、人間の家族という意識を形成することについてこの単元が肯定的な影響を与えたということ、子ども達が口頭で証明したことになるのである。<sup>26)</sup>

さらに、エスキモーと自分たちの各々の文化に関するさまざまな要素についての自分の感じ方を、より直接的な表現で子どもに評定させているのが、SD法である。そこで評定の対象となっている概念は、「極地方」「エスキモーの家族」「共同」「アメリカ人の家族」の4つである。各々について10対の形容詞が示されており、子どもはその概念に対する自分の感じ方を、各々の形容詞対の間に設定された5段階のひとつをチェックすることによって示すことになる。「極地方」に対する感じ方を示させることによって、ネトシリックが生き抜かなければならない環境を、子どもがどのようにとらえているかを把握し、「エスキモーの家族」と「アメリカ人の家族」に対する感じ方を示させることによって、各々の人間性の質についての子ども一般的なとらえ方を把握し、そして、「共同」に対する感じ方を示させることによって、ネトシリックが生き抜くための基本的な因子を、子どもがどのようにとらえているかを判定しようとしているのである。<sup>27)</sup>

このSD法による評価は、明確な比較基準をたてることができにくい自由記述の欠点を克服し、事象に対する統合的・全体的なイメージという、数値ではとらえることのできないものを比較可能な形で表わすものとして取り入れられた。しかしながら、子どものネトシリックのとらえ方が、合理的根拠の乏しい紋切り型のイメージから、自文化との比較・対照によって獲得される人間としての一般性・共通性を念頭に置いたものへと、変化しているかどうかを判定しようとしたにもかかわらず、必ずしも評価者の意図したような明確な反応は得られず、評価方法としては再考の必要があるとされている。

以上のような、各評価手法における問いかけに対する返答から読み取れる“好奇心の有無”“好

奇心が向けられている対象”“好奇心の満たし方”“対象の理解の仕方”は、情意的領域の目標の評価の重要な要素となっている。すなわち“文化人類学的・行動科学的好奇心”の評価は、主に“好奇心の有無”と“好奇心が向けられている対象”を読み取ることによってなされ、“文化人類学的・行動科学的探求モデルへの向上意欲”の評価は、主に“好奇心が向けられている対象”と“好奇心の満たし方”を読み取ることによってなされ、“文化人類学的・行動科学的探求態度”の評価は、主に“好奇心が向けられている対象”“好奇心の満たし方”と“対象の理解の仕方”を読み取ることによってなされているといえよう。

#### IV. 科学的社會認識形成における情意的領域の評価

MACOS評価プログラムにおける情意的領域の評価ストラテジーの分析から、科学的社會認識形成における情意的領域の評価のひとつのあり方として、次のような示唆が得られると言えよう。

1) 科学的社會認識形成における情意的領域は、学習の内的動機に関わることに限定的にとらえ、科学的探求の端緒・推進力と考える。

2) それは、その社會認識が基盤とする社会科学の「好奇心」、その社会科学における探求モデルに近いものへと自分の思考を高めようとする「能力向上意欲」、その探求モデルを達成している科学者に自己を「同一視」して、その科学的態度を内面化しようとすることであると考えられる。

3) その評価は多様な手法を組み合わせることが望ましいが、特にインタビューやチェックリストが有効であると思われる。

4) それらの手法で被験者から得られた返答を、好奇心の有無、対象、探求方法、対象理解の姿勢などの観点で分析することによって、評価が可能になる。

このように考えるならば、市民的資質形成でも社会的教養習得でもなく、科学的社會認識形成に特有な情意的領域の学習評価論が明らかになると言えるのではなからうか。しかしながら、それにもかかわらず、認知的領域の評価に比べてやはり信頼性・妥当性において不十分であることは否め

ない。また、MACOSは「同一視」の対象を文化人類学・行動科学者に求めたため、人間の本質や文化の産物としての行動への好奇心、探求意欲および文化を相対化して人間理解を図る態度が子どもにみられるか、それはどの程度かを評価しようとしているが、他の社会諸科学においても、このように各科学固有の研究姿勢を明確にすることが必要となる。科学的な社会認識形成における情意的領域の評価ストラテジーにとっては、信頼性・妥当性の向上とともに同一視の対象となる社会諸科学一般に通用する研究姿勢の抽出が当面の課題となろう。

【註】

- 1) 拙稿「社会科学科としての社会科」, 社会認識教育学会編『社会科教育学ハンドブック』明治図書, 1994年, pp.82~83.
- 2) Jerome S.Bruner, "Man: A Course of Study", Educational Services, Inc., 1965, p.4.
- 3) 同上書, pp.5~19.
- 4) MACOS 製作当時は、まだイヌイットではなく、エスキモーと呼ばれていた。
- 5) Janet P.Hanley, et al., "Curiosity/Competency/Community. An Evaluation of Man: A Course of Study", Education Development Center, Inc., 1970, p.I-8.
- 6) Education Development Center, "Man: A Course of Study, The Netsilik Eskimos at the Inland Camps", Curriculum Development Associates, Inc., 1968 より作成。セクション名および小単元名は引用文献よりそのまま取って表に組み込んだもので、他の部分は引用者による。
- 7) 前掲書5), p.I-5.
- 8) Education Development Center, "Man: A Course of Study, Talks to Teachers", Curriculum Development Associates, Inc., 1968, p.19.
- 9) 同上書, p.18.
- 10) Education Development Center, "Man: A Course of Study, Evaluation Strategies", Curriculum Development Associates, Inc., 1970, p.5.
- 11) 前掲書5), p.I-4.
- 12) 前掲書10), p.13.
- 13) 同上書, p.18.
- 14) 前掲書5), p.I-8 および F.R. リンク「カリキュラム・カリキュラー-社会科学におけるケース・スタディー」, 『カリキュラム開発の課題』, 文部省, 1975年, p.319.
- 15) 前掲書5), p. IV-11.
- 16) 同上書 pp.31~32.
- 17) 同上書, Appendix B.
- 18) 前掲書10), p.62.
- 19) 前掲書5), Appendix B.
- 20) 同上書, pp. II-1~168, III-27~55, III-89~107 を参考に作成。

- 21) 同上書, p. IV-8.
- 22) 前掲書10), p.32.
- 23) 同上書, p.32.
- 24) 前掲書5), pp. IV-8~9.
- 25) 同上書, p. IV-8.
- 26) 同上書, p. I-60.
- 27) 同上書, pp. III-40~41.

<主要参考文献>

- 1) Jerome S.Bruner, "Man: A Course of Study", Educational Services, Inc., 1965.
- 2) Education Development Center, "Man: A Course of Study, Talks to Teachers", Curriculum Development Associates, Inc., 1968.
- 3) Education Development Center, "Man: A Course of Study, Introductory Lessons / Salmon", Curriculum Development Associates, Inc., 1968.
- 4) Education Development Center, "Man: A Course of Study, Herring Gulls", Curriculum Development Associates, Inc., 1968.
- 5) Education Development Center, "Man: A Course of Study, Baboons", Curriculum Development Associates, Inc., 1968.
- 6) Education Development Center, "Man: A Course of Study, The Netsilik Eskimos at the Inland Camps", Curriculum Development Associates, Inc., 1968.
- 7) Education Development Center, "Man: A Course of Study, The Observer's Handbook", Curriculum Development Associates, Inc., 1968.
- 8) Education Development Center, "Man: A Course of Study, Seminars for Teachers", Curriculum Development Associates, Inc., 1969.
- 9) Education Development Center, "Man: A Course of Study, Evaluation Strategies", Curriculum Development Associates, Inc., 1970.
- 10) Janet P.Hanley, et al., "Curiosity/Competency / Community. An Evaluation of Man: A Course of Study", Education Development Center, Inc., 1970.
- 11) J.S. ブルーナー (鈴木祥蔵, 佐藤三郎訳)『教育の過程』, 岩波書店, 1960年.
- 12) J.S. ブルーナー (田浦武雄, 水越敏行訳)『教授理論の建設』, 黎明書房, 1966年.
- 13) J.S. ブルーナー他 (岡本夏木他訳)『認識能力の成長上・下』, 明治図書, 1967年.
- 14) J.S. ブルーナー編 (塩田芳久, 田浦武雄訳)『学習についての学習 (上・下)』, 黎明書房, 1968年.
- 15) J.S. ブルーナー (岸本弘他訳)『思考の研究』, 明治図書, 1969年.
- 16) J.S. ブルーナー (平光昭久訳)『教育の適切性』, 明治図書, 1972年.
- 17) F.R. リンク「カリキュラム・カリキュラー-社会科学におけるケース・スタディー」, 『カリキュラム開発の課題』, 文部省, 1975年, pp.312~322.

(広島大学)